

## 寂しいまち

駅前を出た広い通り  
薄曇りの中を  
綺麗すぎるインターロッキング  
動かない空間

あれは随分前の夏の日  
甲子園ゆく高校野球部

喜びが伝わる音  
商店街の放送  
その音聞きながらかじってた  
ソフトクリーム  
の皮  
そう二人で

若かったあの頃確かに  
たくさんの通りすがり  
全く気にせず歩いた道  
本当にこのまちなのか

今横目でやっとひとりの人  
背をかがめて立ちすくんでいる

その姿を見ないで  
わざと遠く見つめて  
目的があるような顔をして  
足早に通り過ぎる  
そう一人で

## トロツコ電車

始発のホームを出たら赤い橋  
ふかみどりのなか眩しく  
ガラスのない窓から見おろす  
煌めく川の流れの向こう

その先の目の高さに  
ホテルの赤い屋根白い壁  
昨日のことなのに懐かしい  
くつろぎの時 もう過ぎて行く

今ここに見える夏の瞬間  
賑やかな蝉たちの声の中  
確かに聞こえたひぐらしの声

見えてきたダム  
の向こうに広がる  
エメラルド色の水面の  
上下対象の景色の上に  
登山者のような鉄塔いくつ

すれ違う 電車を待って  
ふたたび動きダムを過ぎる  
見えなくなった空を見上げ  
稜線の高さやっとなかめられる

今ここに見える夏の瞬間  
賑やかな蝉たちの声の中  
確かに聞こえたひぐらしの声

## 砂を踏みしめて

白い砂浜 見下ろすあたり  
黒く小さく 見える動きを見つけ

誰もいない 波打ち際  
靴のまま歩く左に波の音が

足跡くっきりついても  
すぐになくなる  
あなたといられるこのとき  
いつまでだろうか

薄曇りの空どこからか照らされて  
影も見えない砂を踏みしめて

いつの間にか裸足になり  
脱いだ靴を手にしながら波の上を

足跡くっきりついても  
すぐになくなる  
あなたといられるこのとき  
いつまでだろうか

## うごめく光

歴史ある灯台に上り詰めて海を見た  
飛ばされそうな帽子押さえ見下ろす波うごめく光

コンクリートの階段まわりながら登って  
降りる人とすれ違い最後の梯子まで来た  
背中をぶつけそうな穴をくぐったところで  
最上階スラブから眩しい外に出られた

遙かに見える遠くまで広がる大海原に  
流れる波の大きさにも圧倒されそうになる

下に降りて見上げれば綺麗な白空に映える  
灯台守に守られて波のように白く光る

無料駐車場からサンロードを渡って  
海岸につながる広い階段降りて  
波食台地の隙間に歩き回る小ガニが  
波が打ち寄せるたびに隠れて見えなくなる

目の前しぶきを感じて広がる大海原に  
打ち寄せる波の音にも圧倒されそうになる

東みれば日本一の山が見える御前崎  
空の中に頂が浮かぶように白く光る

## 夏祭り

まだまだ明るい夕方の公園  
四つのカレー鍋の前 四列の人  
いくつもの手持ち花火思い思いに  
近所の子供達こんなにかいたのか  
ともした提灯がオレンジ色に光り  
僕たちは正面に向き直る

滝のように流れてく  
大きな太鼓たたく音が  
夜空から反射して 体の中流れる

公園の端の方では 金魚すくいと  
ヨーヨーすくいをして はしゃぐ子供達  
ヨーヨーすくえなくて泣いてる子に  
それをあげている男の子がいる  
ともした提灯がひとたび消されたとき  
僕たちは正面に向き直る

滝のように落ちてゆく  
大きな仕掛け花火が最後  
綺麗で儂い光放ち 夢のように流れる

夜風に揺れてる  
光のカーテン  
儂く消えてく  
綺麗な夢のしずく

流れ落ちた後にふたたびのあかり  
今度は帰り支度のためのあかり  
心の奥に残ったその余韻は  
この夏の夜が作り彩る奇跡  
三人で手を繋いで帰る道  
夏祭りの夜は特別なひととき

静寂の中で溶けゆく笑い  
熱気に包まれゆく夢の時間

## 走馬灯

これまでの思い出  
何十年もの思い出  
頭の中 一瞬で  
いま目の前の写真で

目にしたものの  
聞いた言葉  
口にしたものの  
かいだにおい

住んでた場所  
家族の顔  
遊んだ場所  
友達の声

当時聴いてたレコードの歌  
思い出す走馬灯のように  
不思議なことに忘れもしない  
あのメロディと言葉が

これまでの思い出  
何十年もの思い出  
頭の中 一瞬で  
いま目の前の写真で

色が分からず  
聞き取れなく  
味が分からず  
すぐ消えてゆく

浮かぶ場所  
部分的で  
遊んだ場所  
あそこだったか

当時集めてた宝物  
思い出す走馬灯のように  
不思議なことに一つもない  
あの頃の自分のもの

## どんなにわずかなことでも

どんなに小さな川でも  
最後は海につながる  
つながる海と海は  
海峡を行き来している

流されるのでなく  
流れに乗ることだ  
世の中の動きに  
逆らうことはできない

深海泳ぐカメのように  
深いところにその身を隠し  
流れるような固い甲羅で  
怯むことなく手足を動かし

どんなにわずかなことでも  
抵抗を感じたことには  
流れを素直に受け止めること  
きっと大きな力が働いている

巻き込まれるのでなく  
波に乗ってゆくことだ  
たとえ遠回りでも  
目標変えればいい

大きな海に生かされている  
自分の位置を確かに感じて  
振り回される事を避けて  
心を乱すことないように